



明日の自分にまかせるな

現在時刻7月30日午前0時。リレーエッセイ脱稿期限7月末。課題図書の数ページと最後の数ページだけを読んで読書感想文を書いた夏休み最終日が思い起こされます。思えばその頃から苦手なことを後回しにする癖は一向になおりません。大学時代、「明日の自分にまかせよう」が座右の銘であると言ってはばからぬ先輩がいましたが、筆者も同じく、締切直前の危機感でやっとエンジンがかかりだす体質になってしまいました。筆者は、筆者の所属している科学警察研究所の笠松先生からこの大変名誉あるお役目を引き継いだのですが、廊下ですれ違うたびに、その笑顔の優しさから何とも言えないプレッシャーを感じていました。先生からは「普段考えていることを気軽に書けばいいよ」とのアドバイスを頂き、普段何を考えて生きているだろうと自省してみましたが、普通に生きている20代男性が、そうそう人様に晒せるような類いの面白いことを考えているはずもなく、むしろそのくだらなさで愕然として落ち込みました。これはいよいよまづいぞと思い、参考のため笠松先生の手紙を拝読させて頂きました。しかし、熱い思いのこもった含蓄のある文章が素晴らしいすぎて、笑ってしまうくらい参考にならず、ここはもう開き直って、ウイスキーを舐めつつキーボード上で指が跳ねるままに任せることにしました。そのような経緯で二日程前に「中二病と分析化学(仮)」というタイトルのエッセイが一気に完成しました。しかし、満足したあと一晩寝て再読してみると、そっとゴミ箱にドラッグアンドドロップしてしまう程の出来で、私の愛読している「ぶんせき」に掲載されて同僚諸氏の目に触れることを想像して布団の上で一時間悶えました。

このように筆者は、お題を自分で考えて、ある程度自由にして良い、というのが正直苦手で、何をしたらいいのかわからなくなるタイプの人間です。そのことにも若干関係するのですが、ここで筆者が今年の3月に修了した東京工業大学沖野研究室の素晴らしい伝統を紹介させて頂きます。沖野研究室では、学位論文を書く際、その導入部に必ず執筆者の人となりを表すような「ユーモア」を含ませます。例えば、ある修士論文の「はじめに」は以下のように始まります「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ。バロック音楽の大家J.S.バッハが1720年に作曲したヴァイオリン独奏曲である。」。しかし、その節は以下のように結ばれます「従来法とは異なるコンセプトを持つ全く新しい分析システムの開発が急務である。」。一体この五十行の間にどんなドラマチックなことが起こったのか非常に気になるのですが、このように多少無茶なテーマから論理的かつ自

然に本題に移行していく、文章の組み立て能力を養うことが狙いです。ちなみに例示した修士論文はICP-MSを用いた単一細胞分析に関するもので、内容は科学論文のきちんとしたルールに則った素晴らしいものです。当然のように筆者も学位論文を書く際にネタを考えることになったのですが、後で差し替えますと誤摩化しつつ未だ「ユーモア」ありのバージョンに差し替えることができていません(沖野先生、本当に申し訳ありません)。苦手だからといって後回しにしていたら結局困るのは自分だということは承知しているのですが。

なぜこのようなことになるのか、ちょっと本など参考に考えてみたのですが、自分を大きくみせようとして周囲の評価を気にし過ぎなのではないか、ということに思い当たりました。いい仕事をして周りを喜ばせたい、正直すごいと思われたいけれど、自分の価値基準に自信がなく、周りが要求する水準に達せるのか不安になる。その不安から逃れるために「明日必ずやろう」と言ってとりあえず落ち着くが、明日になると更なる不安に襲われるという訳です。学位論文のネタを考える際も、「このネタだと、研究室の末代までつまらない先輩(笑)だと思われるのではないか」などと思悩み、考えることを先延ばしにしてきました。漫画家などは締切のプレッシャーと不安があるといいアイデアが浮かぶ、という人もいらっしゃるのですが、締切直前にやった仕事でいい思い出はありません。「ぶんせき」の誌面を借りてこのような個人的な話を長々と行って大変恐縮なのですが、このエッセイ?を読んで下さる方々の中でも「わかる、わかるぞ」といってうなずいてくださる方はいらっしゃるのではないでしょうか。とりあえず一人で抱え込まずに周りに相談しつつ、とにかく早めに無理矢理でも始めるのが得策ですね。多額の負債を抱えた青年が命懸けで一発逆転を狙う姿を描いた「賭博破戒録カイジ」という漫画中の名言に「今日だけががんばらなっ…! 今日ががんばり始めた者のみ…明日が来るんだよ…!」というものがありますが、今日のような状況だとやけに心に響きます。今回も喉元過ぎれば…にならなければいいのですが。

さて、結局自意識過剰で稚気たっぷりの恥ずかしい文章になってしまいました。書いていて楽しかったのが良かったかなと思います。笠松先生、ぶんせき編集委員の皆様ありがとうございました。次回は産業技術総合研究所の重田香織博士にお願い致しました。重田博士には大学院時代に大変お世話になりました。豪快な方なので豪快なエッセイになることと思います。

〔警察庁科学警察研究所 岩井貴弘〕